

三国時代、蜀の国の皇帝劉備は、丞相の諸葛亮を非常に尊敬し信頼を寄せていました。

劉備は、臨終の時、息子劉禪が国を上手く治められるように、助けてやって欲しいと諸葛亮に頼み、且つ私心をはさまないで誠意をもって言いました：「息子は平凡な人間なので、皇帝としてやっていくには、おまえの助けが是非必要だ。どうか息子を助けて、良い皇帝にしてやってくれ。若し、息子が指導に従わなかったら、皇帝を辞めさせて、おまえ自身が皇帝になって国を治めて欲しい。私は、息子が国をダメにするのだけは避けたいと思うのだ」と言いました。

劉備の死後、諸葛亮は全力を尽くして、劉禪が国を治めるのを助けました。



言葉の意味：开(開)=打ち出す、持ち出す。誠=真心を込めた、誠意。布=公表する、表す。公=公平である、私心の無い。

使用例：意見の違いがあったが、皆で胸襟を開いて自分の考えを表明し、話し合ったので、意見の違いを解消する良い方法を見つけ出すことができた。



中国語は簡潔で良いですね。たったこの四文字で、日本語にすると「私心をはさまず誠意を尽くす」という意味になります。他にも、「胸襟を開いて真実を語る」とか、「虚心坦懐に心の中を述べる」とかいう意味にも使えます。

この言葉は、《三国志演義》の中に出て来る四字成語なので、《三国志演義》の愛読者たちは、この言葉を見ると、上のお話の場面を連想し、劉備の心を思い、諸葛亮の心境を察して、更には歴史の流れを思い起こすことができるのです。多くの人に感銘を与えるこの物語、しかしながら完全な史実ではないそうです。

日本では、《三国志演義》として親しまれている物語の原型は、北宋の時代には既に出来上がり、様々な題名の本が存在しましたが、中国では、現在《三国演義》という呼び名に統一されたそうです。人々は、遠い三国時代の英雄の話が好きなので、講釈師が街角で面白おかしく話して聞かせていた種本が沢山あり、それらの話を集めて整理して作り上げた歴史小説が《三国志演義》(ここでは、日本で親しまれた名称を使用しましょう)なのです。

《三国志演義》が出来上がったのは、元末明初で、作者は羅貫中といわれています。羅貫中は、たくさん出回っていた講釈師の話の中から、荒唐無稽な話や、史

実に合わない話を取り除き、更に漢王朝の末裔と称した劉備とその一党を善、曹操の陣営を悪と予め設定して話を整理し、物語を作り上げました。

昔から、《三国志演義》は、「実七虚三」といわれていますが、歴史を踏まえて、魅力的なお話が語られ、優れた読み物になっているのです。史実を逸脱しない範囲で、一つ一つの物語が、人々の共感を得られるような筋立てで人気を博しました。



満柏氏画

元朝は征服王朝で、漢族文化人の政治的な活躍の場が極端に狭められたので、文化人の多くは芸術の世界に活路を求め、元代から明初にかけて、多くの戯曲や「四大奇書」といわれる優れた小説が出現したのでした。

「四大奇書」とは、《三国志演義》・《水滸伝》・《西遊記》・《金瓶梅》をあげるのが一般的ですが、中でも《三国志演義》は出色のできばえで、四字成語の宝庫でもあります。

そして中国では、こんな幼い時から、《三国志演義》の中の四字成語を教えるのですね。